

ハンドボール

～ヤングレフェリー育成プロジェクト～

レフェリングの手引き

(財)日本ハンドボール協会

目次

「審判員の手順」	2
「平成15年版ハンドボール競技規則必携」より	
序文(抜粋)、ハンドボールの概念	3
審判員の倫理綱領	4
レフェリーに関する事項	
基本的事項	5
競技の開始前	5
競技中	7
休憩時間中、競技終了	10
技術向上のために	
コート上でのレフェリーの動き方と位置取り	11
ジェスチャーについて	14
笛の合図とそのメロディー	17
適応の過程、その他の注意事項	19
「知っているのと得するルール&知らないで損するルール」	23
「平成18年度審判員の目標」	29
「審判員の心得10箇条」	30
「審判員としての心得」	31

審判員の手順

1. 会場への到着前

- ・ 競技規則（ルール入門書）必携（レフェリングの手引き） 審判手帳（教習カード） 参考資料
- ・ レフェリーウェア・ソックス・シューズ・ジャージ等、笛・カード・筆記用具等の持ち物を確認する。
体調の維持と精神的な調整を心掛け、冷静な判断力が発揮されるように準備する。

2. 試合の前

- ・ ペア（ヤングレフェリー育成担当）との打合せ（審判技術の確認）
- ・ 両チームのユニホームの確認、十分なウォーミングアップ。
- ・ 使用球と競技場の点検（ライン・ゴール・ネット・セーフティーゾーンなど）
- ・ オフィシャル、モッパーとのフレンドシップ。
- ・ 登録の確認をした後、代表者の署名を促す。
- ・ 選手の確認（背番号・手指・装具・金具・ミサンガなどの点検）
- ・ 選手のコートへの入場・整列を促し、挨拶（選手同士 審判ペアの握手）
- ・ 両チームの代表者と握手した後、ペアでそろってトスを行う。その結果をオフィシャルに伝える。
- ・ 両ベンチスタッフと握手の後、ゴールレフェリー、センターレフェリーに分かれる。
- ・ ゴールレフェリー、タイムキーパーと確認して試合開始の吹笛。

3. ハーフタイム

- ・ タイムキーパーとスコアシートの確認。
- ・ 前半の判定などの確認と後半の判定の検討。
- ・ 育成担当者、審判長などに指導を受ける。
- ・ 競技場の点検（ライン・ゴール・ネット・セーフティーゾーンなど）
- ・ 退場者がいた場合、タイムキーパーと残り時間の確認（チーム代表者に通知）
- ・ GR、タイムキーパーと確認して後半開始の吹笛。

4. 試合後

- ・ 整列を促し、挨拶（選手同士 審判ペアの握手）
- ・ 監督、選手、ペアとの握手や、ねぎらいのことは「お疲れさま...」
- ・ タイムキーパーとスコアシートの確認後、署名して、オフィシャルにお礼の挨拶。
- ・ ヤングレフェリー育成担当や他のレフェリーに助言を求める。
- ・ 審判手帳（教習カード）への記入と捺印を受ける。
- ・ 次に向けて課題の検討。大会関係者への挨拶と体調の維持。

「平成17年版ハンドボール競技規則必携」より抜粋

序文

（前略）～本書および競技規則書の表紙の三角形はトリアス（3者の意）をデザインしたもので、ハンドボールはチーム（プレーヤーやトレーナー）、大会役員・競技役員、そしてファンの皆様、という3者により成り立っていることを表したものである。～（中略）

最後に、レフェリーのみならずトレーナー諸氏におかれても、本書を通して競技規則をより深く理解していただき、本書がハンドボール競技発展の一助となれば幸いである。

ハンドボールの概念

（前略）～私たちはスポーツをしたり、スポーツを観戦することによって人生を豊かにし、潤いを与えられる。スポーツは私たちに自分自身を見つめる機会を与えてくれ、身体的・精神的成長をも助長する。

そして、国や肌の色や思想の違いなどに関係なく、同じ条件で大勢の人々と接する機会を与えてくれ、複雑な現代社会のなかで、私たちの生活からストレスを解消し、健康な生活を約束してくれる。

ハンドボールは、最もスピーディーなスポーツのひとつであり、体力、筋力、スピード、正確な技術、そして協調性が要求される。また、身体全体を使うので、走・投・跳がバランスよく鍛えられる。さらに、技術的観点からも、プレーヤーにとって、チームにとって、コーチにとっても、厳しいスポーツである。防御から攻撃への素早い切り替えには、身体が思い通りに動くことが要求される。～（中略）

ハンドボールは相手より多くの得点をあげることが目的なので、攻撃を主としたスポーツであり、観衆も多く得点が入ることを望んでいる。このことから、無意味にボールを回すような消極的な戦法は、まったく意味がない。堅い防御はゲームの上で大切であるが、それは力強く素早い攻撃の基礎である。世界中に知られているスポーツのなかで、ハンドボールほど「攻撃は最大の防御」ということばが当てはまるスポーツもない。

ハンドボールの競技規則の精神は、相手の身体を傷つけることなく、チームに本来のプレーを行う正当なチャンスを与えることである。この前提があって初めて、ゲームにおいてアドバンテージルールが十分に機能を発揮する。よって、アドバンテージルールは非常に大切である。また一方で、レフェリーはこの競技が本当に厳しいスポーツであることを十分に理解していなければならない。ブロックプレーなどの身体のぶつかり合いが、スピーディーなゲーム展開のなかで起こるので、レフェリーの任務は非常に大切である。さらに、監督やコーチはもとよりプレーヤーも、スポーツ理論一般、そしてゲームにおけるマナーを理解していなければならない。特に競技規則の文字どおりの意味だけでなく、スポーツマンシップに忠実でなければならないことを理解し、アンチ・ドーピングの精神を遵守しなければならない。レフェリーも同じように、ゲーム自体に関してはもちろんのこと、多様なチーム構成、戦術、技術までも正しく理解するように努力しな

なければならない。これらの知識をもとに、ゲームをうまくリードするための「直感」を習得することが、レフェリーとして大切である。

ゲームにおいて、プレーヤー・監督・レフェリー・役員・観衆は、正しいハンドボールの発展に対して、等しい責任がある。スポーツの正しい精神を基礎として、相手の人格に敬意を払い、競技規則の特性・原理の正しい理解に基づいて、参加するすべての者は、スリリングでエキサイティングなチームゲームスポーツである近代ハンドボールの発展のために寄与しなければならない。

審判員の倫理綱領

レフェリングは、競技中の判定はもとより、
ハンドボール競技の進歩・発展に寄与するものであり、
レフェリーは責任の重大性を認識し、
ハンドボール競技への情熱を基にすべての人に奉仕するものである。

1. レフェリーは生涯学習の精神を保ち、つねにハンドボール競技の正しい理解とレフェリング技術の習得に努めるとともに、その進歩・発展に尽くす。
2. レフェリーはこの任務の尊厳と責任を自覚し、教養を深め、人格を高めるように心掛ける。
2. レフェリーはプレーヤーや監督の人格を尊重し、やさしい心で接するとともに、レフェリング内容について理解と信頼を得るように努める。
4. レフェリーは互いに尊敬し、ハンドボール競技関係者と協力してレフェリングに最善を尽くす。
5. レフェリーはレフェリングの公平性を重んじ、レフェリングを通じてハンドボール界の発展に尽くすとともに、競技規則・諸規定の遵守および秩序の形成に努める。
6. レフェリーはレフェリング活動にあたって営利を目的としない。

(財)日本ハンドボール協会審判部

平成19年度審判員の目標

審判員の課題

1. 審判に必要な身体能力の向上

- (1) ハンドボール競技のスピードアップにより、審判員は走力を含めた身体能力を向上させる必要がある。
- (2) スローオフ時には、審判員はセンターラインとサイドラインの交点付近にいたることが望ましい。そのためには得点を確認した後、素早くポジションを移動する必要がある。クイックスタートのためにどうしても間に合わない場合には、従来どおり後方から吹笛することになる。
- (3) 後半になっても、動きや判定基準が前半と変わらないよう体力を培う。

2. アドバンテージ・ルール(競技規則13:2, 14:2)の順守

- (1) アドバンテージはハンドボールの醍醐味である。競技レベルによる差はあるが、「競技を早まって中断しないように」という条文の言葉を忘れない。
- (2) 攻撃側チームの違反の直後に防御側チームがボールを所持した場合も同様である。
- (3) 危険なプレーに対する罰則を忘れてはいけない。

3. コート上でのレフェリーの動きと位置取り

- (1) 両レフェリーは、ボールに対してだけでなく、その周辺や全体の事象にも注意を払う。両レフェリーは、ジェスチャーなどでプレーヤーとコンタクトをとることにより、プレーヤーを観察していること知らせる。
- (2) ゴールレフェリーの立つ位置は、ゴールポストに近すぎてはならない。
- (3) 両レフェリーは、得点後にポジションを移動する際も、プレーヤーとボールから目を離してはならない。

研究課題

1. マンツーマン防御システムに対するレフェリーの位置取りについて
2. パッシブプレーの予告合図を出すタイミングとパッシブプレーの違反を判定するタイミングについて
3. 許される行為と許されない行為の判定について(8条の運用)

レフェリーに関する事項

【基本的事項】

冷静さ 鋭い観察力 優れた判断力 確固たる信念 厳正公平な態度

日常生活においてもスポーツマンとして...

- | | | |
|------------------------|---|------------------|
| ・正しいスポーツの理念に対する観察力 | } | 研鑽を積んで
身につける！ |
| ・ハンドボール競技の技術の進歩に対する観察力 | | |
| ・競技の進行に対する洞察力 | | |

これらの精神的・知的な要素を支えるために

プレーヤーと同様、十分な身体的トレーニングを怠ってはならない！

レフェリーは、プレーヤーのために存在する ...常に心に留めて審判にあたること！

激しいトレーニングによって築き上げたプレーヤーの力や技術が、十分に発揮

できるように、公平の原則に立ち、プレーヤーにも観衆にも納得のいく判定を！

レフェリーの独善的な笛 プレーヤーや観衆の競技への情熱を奪い去ってしまう。

スポーツの理念に反する結果をもたらすことになる。

競技の成否は、プレーヤーとレフェリーと、さらにそれを取り巻く観衆によって左右される。

【競技の開始前】

1. コンディションの調整

- 担当の決まった競技の前日は、特に念入りな配慮が必要である。
- 当日は精神的な調整にも心掛け、冷静な判断力が発揮されるよう調整する。

2. 競技会場への到着

- 担当する競技の開始時間の1時間前には、到着しているべきである。
- 全国大会等においては、主管者の指示に従って行動しなければならない。
- 競技会場に到着したら、審判員控室を確認し、競技会場内や様子を把握する。

3. レフェリーの持ち物

- 2名のレフェリー（ペア）は、1つのチームである。
- レフェリーウェア（上下）やストッキング、シューズ、ジャージもペアで同じものを着用すべきである。
- 笛、イエローカード、レッドカード、スコアカード、ワッペン、筆記用具、ストップウォッチ機能のついた時計を用意し、公認審判員手帳と公認審判員登録証を携帯しなければならない。

4. レフェリーの服装について

- a. (財)日本ハンドボール協会公認のレフェリーウェアを着用することを推奨する。
- b. ペアで同じレフェリーウェアを着用しなければならない。

5. コートの点検

- a. 競技大会では、すでに主管者がコート等を設営した状態になっていることが多いが、競技の開始前には、各ラインやゴールの状態(ゴールネットの状態も含む)、交代地域の状態、掲示設備(得点や時間)、照明の明るさなどをあらかじめ点検する。

6. オフィシャル席の点検と打合せ

- a. タイムキーパーは公示時計の操作・管理を、スコアラーは記録用紙への記入を行う。
- b. タイムキーパーとスコアラーは、レフェリーと密接な連携を保たなければならない。
- c. 公平を保つためにオフィシャル席には関係者以外誰も立ち入ることが許されない。
- d. 計時の方法、警告・退場・失格・追放に際しての相互確認の方法、交代地域の遵守の徹底について、競技の開始前にレフェリーはオフィシャルに協力を依頼する。

7. ボールについて

- a. レフェリーは、2個以上のボールが用意されていることを確認し、使用するボールを決定する。
- b. 予備のボールは、必要が生じた時すぐ使用できるよう、オフィシャル席に置いておく。
- c. ボールの点検内容については、競技規則3:1~2に従う。

	外 周	重 さ
成年男子、高校生男子(J.H.A. 3号球)	58~60cm	425~475g
成年女子、高校生女子、中学生(J.H.A. 2号球)	54~56cm	325~375g
小学生(J.H.A. 1号球)	49.5~50.5cm	255~280g

(空気圧の点検には、デジタル空気圧計を用いるとよい)

8. メンバー表の提出、コイントス

- a. 一般的には、第1試合のチームは競技開始時間の30分前に、第2試合以降のチームは前の試合の前半戦終了時に、オフィシャル席前で2名のレフェリーの立会いのもとに、メンバー表をオフィシャルと相手チームに提出する。このときに提出するのは、キャプテンまたはチームの代表者(決定権を有する者)であればよい。同時に、ユニホームの色等を、現物を用いて確認する場合もある。
- b. コイントスは、競技の開始直前(すなわち両チームの挨拶後)に一方のレフェリーが、他方のレフェリーと両チームの代表者の立会いのもとに行う。コイントスの方法は、各チームに対してコインの表裏を指定し、コインを上に向けて落ちてきたときの表裏の向き方で勝チームを決める。コイントスに勝ったチームは、スローオフかコートの選択権を有する。コイントスの結果によっては、前半の競技の開始前にサイド(チームベンチ)を交代しなければならない場合もあり、この場合は速やかに移動して交代

するよう促す。コイントスには必ずコインを用いなければならない。

9. ウォーミングアップ

- a. 担当競技の開始前には、ウォーミングアップを充分に行わなければならない。競技の開始前にプレーヤーがコートでウォーミングアップを行っている場合、同じフロアでレフェリーもペアでジョギング等を行うことにより、プレーヤーとコミュニケーションを図ることもでき、また、レフェリーの緊張を緩和する方法にもなりえる。すでにレフェリーはパフォーマンスを演じ始めていることになる。

10. プレーヤーとチーム役員の確認

- a. 担当競技の開始前には、両チームが正規のユニホームを着用していることを確認し、記録用紙とプレーヤー・チーム役員を確認する。
- b. さらに、チーム責任者がいて、どの人なのかを確認しなければならない(チーム役員・選手登録証を活用して確認することができる)。
- c. パワーパンツの色(短パンツと同色でなければならない)や、プレーヤーを危険にさらすようなものを身につけていないか(爪・イヤリング・ピアス・装具等)についても点検する。腰痛ベルトは、ユニホームの中に着用させなければならない。

【競技中】 - 持っているパフォーマンスを発揮するために

1. 最初のスローオフ

- a. 最初のスローオフを合図する笛で、競技時間が開始される。2名のうち、どちらのレフェリーが最初にコートレフェリーになるかについては、ペアの中で決める。
- b. 最初のスローオフを合図する場合、すべてのプレーヤーが正しい位置にいることを確認し、交代地域の状況を把握し、さらにオフィシャル席の準備状態を確認した上で、ゴールレフェリーとコンタクトをとって笛を吹く。
- c. この合図後、公示時計が正常に作動していることをレフェリーは短時間で確認する。

2. 笛の音とコミュニケーション

- a. レフェリーは、予備の笛を携帯しておくこと。また、笛の種類は、ペアで同一のものを使用しなければならない(金属製・プラスチック製、コルクの有無など)。
- b. レフェリーは、笛の音の強弱、長短、メロディーなどで、試合の状況や場面に応じた笛の吹き方を工夫しなければならない。例えば、攻撃側の違反(オーバーステップ・チャージング・ダブルドリブル・パッシブプレーなど)を判定したとき、あるいは7mスローや罰則(警告・退場・失格・追放)を判定したときは、長く強い笛を吹くべきである。通常のフリースローや得点の際は、それほど強い笛の音は必要ない。

得点の後のスローオフに際して、あるいは各種スローを行う位置の修正した後など、競技を再開する際には、短く明瞭な笛の音がよい。

- c . タイムアウトをとる場合の笛の吹き方は、タイムキーパー（オフィシャル席）に向かって短く明瞭に3回吹いてジェスチャー16を用いる。タイムアウトの後に競技を再開する際には、ペアとタイムキーパーとコミュニケーションをとってから明瞭な笛の音で合図する。
- d . 警告や退場などを判定したとき、誰を警告または退場としたかを、違反したプレーヤー・チーム役員・オフィシャル・ペアレフェリー・観衆に分かるように示す。一般的に、レフェリーは相手の正面に立ち、目を見つめてジェスチャー13・14を用いる（その違反の内容や試合の状況にもよるが、怖い顔よりも笑顔で対処した方がよい状況もある）。競技を再開する際には、短く明瞭な笛の音がよい。
- e . コート上のプレーヤーを退場としたとき、退場となったプレーヤーが完全にコートから出たことを確認する。退場の後に競技を再開する際には、2本の指を伸ばした片腕を真っ直ぐに挙げて笛の合図を行う。
- f . 試合中、ペアレフェリーやオフィシャルとコンタクトをとってコミュニケーションを図ることにより、レフェリーは自分自身を落ち着かせることもできるし、視野を広く保つことにも一役かってくれる。また、試合中の笛の音色は、レフェリー自身の精神状態のバロメーターになる。試合の中に埋没してしまうと、気付かないうちに精神が高揚した状態になり、笛の調子が強くなりすぎてしまう傾向になりやすいので、自分自身を冷静にコントロールすることが大切である。

3. ジェスチャー

- a . レフェリーは、規程のジェスチャーを正しくかつ的確に用いることを義務づけられている。
- b . フリースローまたはスローインを判定したとき、次に行うべきスローの方向を直ちに示さなければならない（ジェスチャー7・9）。
- c . 7mスローを判定したときには、直ちに7mラインを指し示さなければならない。
- d . レフェリーは走りながら、または歩きながらジェスチャーを行ってはならない。笛を吹いた後、レフェリーは少しの間立ち止まるか、違反の生じた地点に来て、違反に応じたジェスチャーを行わなければならない。
- e . 方向指示（ジェスチャー9）または7mスローの判定に対する理由の説明が有用であるならば、インフォメーションのためにジェスチャー1～6・11のうち適用するものを1つ用いることができる。ただし、攻撃側プレーヤーの違反（ゴールエリアへの侵入・オーバーステップ・オーバータイム・チャージングなど）には、方向指示の後に理由を説明するジェスチャーを用いるべきである。
- f . レフェリーのジェスチャーは、競技規則書（51～59ページ）の写真、および本書の解説にあるとおりに行わなければならない。鏡の前でジェスチャーの練習をするのが最良である。

g . ジェスチャーは、レフェリーがプレーヤー・チーム役員・ペアのレフェリー・オフィシャル席と意思の疎通を図る大切な手段である。レフェリーがジェスチャーを常に適切に用いれば、競技の展開の中で誤解や混乱がなくなるであろう。また、観衆にとっても判定を理解しやすくなるはずである。もしもレフェリーがジェスチャーを効果的に使用し、正しくかつ適切に適用できるならば、万人に心地よい印象を与えるであろう。

4. レフェリーの位置と観察範囲について

- a . 原則として、両レフェリーはコート上で対角線上に位置をとることになっている。
- b . コートレフェリーは、ボールを持っているプレーヤーとそのプレーヤーからボールを奪おうとするプレーヤーたちを観察する。コート上に完璧な位置はない。プレーヤーのプレーから目を離さず、かつプレーを監視できるよう、常に動いてコート上の最適な位置を絶えず探し求めなければならない。
- c . ゴールレフェリーは、ゴールエリア付近を管理しなければならない。ゴールレフェリーのいる場所はゴールポストに近づきすぎたはいいけない。最良の観察地点を探し求めなければならない。よい観察地点とは、ゴールレフェリーがゴールエリア付近のプレーをよく見て「自分のコート上の担当区域」をもつということである。
- d . 両レフェリーは、競技中時々互いにサイドを交代しなければならない。一般的には、時間を目安に交代されている。交代するタイミングは得点により競技が中断されたときや7mスローの判定をしたとき、あるいはタイムアウトのときなどである。【改正：クイックスタートに対応するために必ずしも時間を目安に交代できない場合もある】プレーの進行中に交代すべきではない。なぜならば、コート上に死角が生じるからである。

e . 7mスロー時



5. 判定の軽重と相違について

- a . 両レフェリーが1つの違反に対して笛を吹き、どちらのチームの違反かについては一致しているが、罰則の重さについて見解が異なる場合は、重い方の罰則を適用する。例えば、コートレフェリーが攻撃側チームにフリースローを与え、ゴールレフェリーが7mスローを判定した場合は、7mスローとなる。また、コートレフェリーが防御側プレーヤーを警告としたが、ゴールレフェリーは同プレーヤーを退場と判定した場合は、退場とする。すでに警告となっているプレーヤーに対して再び警告を出すことのないように、しっかりと警告を管理することが大切である。
- b . 両レフェリーが1つの違反に対して笛を吹いたとき、あるいはボールがコートから出たときに、どちらのチームがボールを所持するかについて、両レフェリーの見解が異なった場合は、必ずタイムアウトをとり、両レフェリーが協議した末に合意した判定を採用する。ただし、合意に達することができない

場合は、コートレフェリーの見解を優先する。協議の後、はっきりと方向を示し笛の合図で競技を再開する。

例として、コートレフェリーがAチームのスローインを判定し、ゴールレフェリーがBチームのスローインを判定した場合や、コートレフェリーがチャージングの判定をし、ゴールレフェリーが7mスローを判定した場合、直ちにタイムアウトをとって短時間で結論を出すことが大切である。～（中略）～競技中、頻繁に判定の相違が生じることは好ましくなく、よりの確な位置取り、明確な区域分担を常に探求し、審判技術を高めなければならない。

両レフェリーが協議を終えた後には、はっきりと方向を示し笛の合図で競技を再開しなければならない（17：8）。

c. シュートしようとしているプレーヤーに対して防御側プレーヤーが違反をしたが、ボールは相手ゴールに入った。当然、得点が認められるべき状況であるが、レフェリーが違反に対する笛を早く吹いてしまったならば、得点を認めることができない（9：1）。このような状況は、判定の相違ではなくてレフェリーの吹笛の不適切なタイミングに起因するものである（13：2，14：2）。

6. レフェリーのメモについて

両レフェリーは競技中の得点をオフィシャルと連携して管理し、警告・退場・失格・追放をメモカードに記録する。

~~【改正：カードの出し入れの手間を省くため、手の甲や腕に直接シール等を貼って記録してもよい】~~

【休憩時間中、競技終了後】

1. 確認事項

得点と罰則について、スコアラーの記録と自身のメモとを突合させて確認する。また、必要事項がすべて記録用紙に正確に記入されていることを確認した後にサインする。

2.

3. レフェリーの反省

レフェリーは競技の休憩時間や終了後、判定や競技の運行などについて各ペアで振り返ってみることも必要であるが、他のレフェリーから批評を受けることも審判技術の向上のために大きな力になるので、求めて批評を受けるべきである。審判長、マッチバイザー、当該試合の監督（チーム責任者）に意見を求めることは重要である。他のレフェリーに対して批評することも、また自身の審判技術の進歩につながる。

4. 大会時のレフェリーの行動について

大会時のレフェリーは、レフェリーであることを十分に自覚して節度ある行動をしなければならない。

別の試合で、レフェリーが交代地域に入ることなどは、厳に慎まなければならない。

技術向上のために

以下の解説は、国際ハンドボール連盟の競技規則・審判委員会（IHF / PRC）メンバーであったJanis Grinbergas氏がレフェリーの知らなければならないコート上での位置や動き方、ジェスチャー、笛の吹き方などの様々な方法について書いたものを、2001年8月改正に則して改定を加えたものである（その後、2006年までに改正された内容を加筆修正した）。

【コート上でのレフェリーの動き方と位置取り】

1. コート上には、ここからならばプレーを全て見渡せるというような完璧な位置はない。プレーヤーの動きから目を離さず、かつプレーを監視できるよう、レフェリーは常によく動き、コートレフェリーは左右のサイドライン近くで最もセンターライン寄りになるプレーヤーと、センターラインの中央付近にいるプレーヤーとの間に位置を取るのがよい。

2. コートレフェリーは遅れてボールを追走したり、目的もなくコート上を動いたりしてはならない。レフェリーが、ボールを持っているプレーヤーの真後ろにいたり、センターラインを越えたあたりに立ち止まったり、あるいはセンターラインの方に逆戻りしたりするのをよく見かける。これでは、攻撃中のチームがボールをとられてしまったときに、そのコートレフェリーは全体を見渡せなくなる（前に立ちただかるプレーヤーが視界を奪ってしまう）ばかりか、防御態勢を取るために帰陣しているプレーヤーとこれに対して反撃しているプレーヤーの間に挟まれる状態になる可能性も出てくる。

このような状況のとき、レフェリーにとって最善の策は、プレーヤーの動きを妨げないようにするために立ち止まることである。攻撃の波（動き）が通り過ぎた後に、レフェリーはプレーヤーたちから目を離さず、何よりも先ずプレーヤーがシュート体勢に移行する状態を観察できるように、プレーがよく見える位置を見つけようとするべきである。

3. ゴールレフェリーからコートレフェリーに移るレフェリーは、プレーヤーの動きに合わせて移動していなければならない。さらに、攻撃側チームの中で最も遅れてくるプレーヤーの位置に合わせなければならない。

IHF / PRCの規程では、両レフェリー（コートレフェリーとゴールレフェリー）はコート上で互いに対角線上に位置を取るようになっていく。コートレフェリーはボールを持っているプレーヤーとそのプレーヤーからボールを得ようとするプレーヤーたちを観察する。コートレフェリーは、競技規則に則ってプレーが行われているかどうかを確認するために、ボールを持っているプレーヤーと、そのプレーヤーからボールを奪おうとするプレーヤーがよく見える位置を見つけなければならない。

4. 同時に、コートレフェリーはその他のプレーヤー、特にゴールエリアライン付近でプレーしているプレーヤーへの注意をおろそかにすべきでない。レフェリーは、プレーヤーのプレーを監視していく中で、ジェスチャーなどでプレーヤーとコンタクトをとることにより、プレーヤーたちが行おうとしている違反を見ているのだということをプレーヤーに分からせなければならない。

残念ながら、コートレフェリー、または悪くすれば両レフェリーともに、大抵の場合注意がボールだけ、あるいはボールの周辺での行為だけに注がれてしまっているのである。両レフェリーはボールに対してだけでなく、その周辺や全体の事象にも注意を払わなければならない。

5. 競技中、ゴールレフェリーは目の前のゴールエリア付近を管理しなければならない。さらに両レフェリーはサイドライン上とコーナーからのスローインも管理しなければならない。

6. 両レフェリーがコート上で正しい位置をとることにより、すべてのプレーをまるで1つの「箱」の中に取り込むような形で監視するのである。

7. 両レフェリーがコート上で正しい位置を選択し、かつ迅速に状況に対応するならば、レフェリーは何を許して何を許さないのかをプレーヤーたちは常に理解するであろう。

8. コートレフェリーはその技能を磨き、高めていかなければならない。笛の後、コートレフェリーはプレーの中断した地点に急行し、スローの方向とスローの実施の地点を直ちに示すと同時に、防御側プレーヤーに対してはレフェリーの動作と視線で、スローを行う際の3mの距離（スロアーから3m以上離れること）を守らせるようにする。もしもレフェリーが違反の起こった地点から非常に遠い位置にいたならば、その地点にすぐに行くことが非常に困難となる。これはレフェリーが優柔不断でその動きが緩慢であった結果に他ならず、このようなレフェリーに適切な行動は期待できない。

プレーヤーが競技規則に則った位置につき、フリースローを行える状態になった後や、3mの距離を修正する笛を吹いた後、レフェリーはスローの妨げにならないように、プレーヤーの邪魔にならない場所に素早く移動しなければならない。

9. 人は十人十色であり、それぞれのレフェリーにも個性があることは明白である。しかしながら、それぞれの個性はIHF / PRCが規定するガイドラインの枠の中で表現されるべきである。

10. ゴールレフェリーの立つ場所は、ゴールポストに近すぎてはならない。ゴールレフェリーは最良の視野を得るための観察地点を探して移動しなければならない。よい観察地点とは、ゴールレフェリーがゴールエリア付近のプレーをよく見て「自分のコート上の担当区域」をもつということである。ゴールレフェリーは顔を真っ直ぐにコートの方に向け、機敏に対応できるように立ってプレーに集中する。ゴールレフェリーは全競技時間を通して決してゴールエリア内に立ち入らず、アウターゴールラインの後方からプレーを注視していなければならない。

11. 【改正：両レフェリーは、過去には時間を目安に、得点後に競技が中断されたときや、7mスローの判

定をしたとき、あるいはタイムアウトのときなどにサイドを交代していたが、クイックスタートが頻繁に行われるようになった現在では、得点後に交代することは困難であることから、7mスローの判定をしたときやタイムアウトの時など状況に応じて交代するタイミングを判断しなければならない。】プレー進行中に、レフェリーはポジション・チェンジをすべきでない。なぜならレフェリーのそれぞれが、同時に各サイドライン付近に位置しており、ボールがゴールラインを通過したかどうか、どちらのレフェリーが見るべきかはっきりしない状況では、レフェリーのポジション・チェンジをするべきではない。両レフェリーは対角線方向に交代しないで、サイドラインに沿って交代することが望ましい。

12. チームがマンツーマンディフェンスの状態になったならば、コートレフェリーはこの2名のプレーヤーの行動をより上手く管理するために、これらのプレーヤーを横から見る位置をとるべきである。このような攻防では、コートレフェリーはゴールレフェリーとコンタクトを取り、この2名のプレーヤーの行動に合わせてよい位置取りをしなければならない。

13. 一方のチームがマンツーマンディフェンスを仕掛けたならば（例えば得点の後）、ゴールレフェリーとなったレフェリーはペアのレフェリーをフォローし、慌てて自らの位置を変えるべきではない。コートレフェリーはボールの行方を追ひ、ゴールレフェリーは他のプレーを監視する。

14. シュート、またはパスミスなどで攻撃側チームがボールの所持を失った後、あるいはレフェリーが攻撃側プレーヤーのミス（オーバーステップ、ダブルドリブル、シュートに際してのラインクロスなど）を認められた場合には笛を吹いた理由を示した後、コートレフェリーはサイドラインに沿って走り、速やかにアウターゴールラインに後方に位置をとる。そのとき、プレーヤーの行動を視野に入れるために、レフェリーは走りながら顔をコートの方に向けておく（状況によっては、立ち止まって観察することも必要である）。速攻に関しては、レフェリーは攻撃していくプレーヤーと共に走る。その間、残りのプレーヤーは他方のレフェリーが観察する。

15. プレーヤーがシュートの動作中、またはシュート後にゴールキーパーに衝突し、双方または一方がゴールエリア内に倒れた状態となった。このときボールは既にパスされてしまっている。ゴールレフェリーはこの状況を見落としたり、見逃したりしてはならない。レフェリーはプレーヤー同士の衝突に注意を払わなければならない。そして、必要であれば救護処置を施させる。

16. 攻撃側プレーヤーがゴールキーパーの頭部にボールを当てて、あるいは他の方法で負傷させてしまい、レフェリーがゴールキーパーはプレーを続行不可能と判断した場合、直ちに競技を中断し負傷者の救護を優先しなければならない。コートプレーヤーが負傷した場合も同様に対処する。しかしながら、負傷の程度が本当に重いものかどうかをレフェリーは確認しなければならない。残念ながら、人は常に正直なスポーツマンとして行動するとは限らない。大怪我であると偽り、レフェリーに対して演技をする者も多いのである。

17. プレーヤー同士の衝突が起こった場合、負傷したプレーヤーの近くにいた方のレフェリーが競技を中断させて負傷者の対応にあたる。その間、他方のレフェリーは他のプレーヤーたちの行動を管理する。その他の理由による競技の中断（例えば、床が滑りやすくなる、ゴールネットが破損するなど）の際には、両レフェリーのうち1名だけが起こった事柄の処理にあたり、ペアのレフェリーはその間、他のプレーヤーたちの行動を観察する。

18. 7mスローの判定をしたならば、両レフェリーは次のように位置をとる。両レフェリーは、それぞれ両サイドラインに沿って、7mラインとゴールラインの中間付近に立つ。7mスローを行うプレーヤーの利き腕に応じて、両レフェリーはどちらがコートレフェリーになるかを決定する。

レフェリーは7mスローを行わせる笛が騒音で聞こえなくなるという状況を考慮して、吹笛と同時にスローを促すジェスチャーをする。レフェリーがスロアーの真後ろに位置すると、スロアーはレフェリーのジェスチャーを見ることができないので、このような位置取りは誤りである。正しくは、スロアーが向いている方にコートレフェリーが立つ。コートレフェリーは、正しくスローが行われるかどうか見極めるために7mラインの延長線上に立たなければならない。他方のレフェリーはアウターゴールライン沿いに位置をとる。コートレフェリーはゴールレフェリーがアウターゴールライン沿いの位置についてを確認してから、7mスローを行うための笛を吹く。

19. レフェリーの中には、競技中すべての事象を自身の管理下に置きたがる人がいる。そのようなレフェリーは、攻撃に伴って走っている最中でさえ、交代地域に戻っていくプレーヤーの交代が正しく行われているかどうか、交代地域の秩序が正しく保たれているかどうかを観察しているのである。プレーヤーの交代はオフィシャル席によって管理されているにもかかわらず、この種のレフェリーはコート上にいるプレーヤーの行動を管理するという任務があることを忘れてしまっている。もちろんレフェリーは、プレーの中断中やタイムアウトが取られている間は、交代地域の秩序も監視する。

20. 体育館内や競技会場で行う両レフェリーのウォーミングアップは、できるだけ人目につく場所で行い、レフェリーの真剣な準備態度をプレーヤーや観衆に理解してもらえるように心掛けるべきである。

[ジェスチャーについて]

21. レフェリーはIHF / PRCによって規定されたジェスチャーを、正しくかつ確実に用いることが義務づけられている。プレーヤー・コーチ・観衆に判定の理由や根拠がはっきりと分かるよう、レフェリーはジェスチャーで示さなければならない。

22. レフェリーがプレーの最中に（チャージングやオーバーステップ、ラインクロスなどの）違反を見つけたならば、直ちにスローの方向を示し、そしてその理由や違反の種類をジェスチャーで知らせなければならない。

23. 走りながら、または歩きながらジェスチャーを行ってはならない。笛を吹いた後、レフェリーは少しの間立ち止まるか、違反の生じた地点に来て、違反に応じたジェスチャーを行わなければならない。

24. 罰則を段階的に適用したときや注意を与えたとき、レフェリーはその根拠をジェスチャーで示さなければならない。フリースローや7mスローの判定に対する理由の説明が有用であろうと思われる場合には、インフォメーションのためにジェスチャーを用いることができる。

25. 違反したプレーヤーを退場とするときには、競技の再開が7mスローなのか、またはフリースローなのかを、レフェリーは直ちに示さなければならない。7mスローとなる違反が起きたときに、直ちにレフェリーが7mスローの笛を吹かなかったならば防御側チームは意識的にゴールエリアライン前に立ってフリースローをアピールするであろう。そしてこれが7mスローの場合には、両レフェリーはプレーヤーにゴールエリアライン付近から退くようジェスチャーなどで示さなければならない。反対に、レフェリーの曖昧なジェスチャーのために攻撃側チームが7mスローだと思いこんでいる場合は、ボールを持っているプレーヤーに近づいてフリースローを判定したことを知らせ、防御側プレーヤーをゴールエリアライン付近まで戻すことになる。

26. 違反の起こった地点からフリースローが正しく行われなときは、レフェリーはそれを正さなければならない。厳密に言えば、スローを行う前に誤った位置を正すべきであり、スローを行った後に正すべきではない。このようなフリースローの位置の修正はプレーのリズムを乱すものであり、競技時間も浪費することになる。ボールを所持したチームが自陣のゴールエリアライン前からフリースローを行うとき、スローを行う場所には違反の起こった地点から約3mの許容範囲が認められる。しかし、フリースローの位置が相手チームのサイドに近づくにつれてこの「許容範囲の三角形」は小さくなり、相手のフリースローラインのところでは許容範囲はゼロとなる（フリースローの地点を正確に守らせる）。

27. スローオフ、スローイン、フリースロー、または7mスローを行うとき、片方の足を必ず床の上に置いておかななければならない。歩いて、走って、ジャンプして、あるいは床に座り込んで、上記のスローを行うことは許されない。

28. フリースローが判定され、フリースローラインの前でフリースローを行うときは、防御側プレーヤーが3mの距離を守らなかった場合、レフェリーはプレーヤーを注意することができる。この違反が繰り返されたときは、フリースローを行おうとしているプレーヤーに最も近い防御側プレーヤーを警告とする。さらにこのプレーヤーがこの違反を繰り返したときは退場となる。

29. ボールが防御側プレーヤーに触れてアウターゴールラインの外へ出たならば、レフェリーは両腕を身体の前方に平行に伸ばしたジェスチャーでコーナーからのスローインであることを示す。どちらのチームがボールを所持するのかわかりにくい場合には笛を吹き、合わせてジェスチャーによりスローの方向を示す。

30. イエローカードは違反したプレーヤーに対して、はっきりと示さなければならない。同時にイエローカ

ードはオフィシャルやペアのレフェリーにも分かるように示さなければならない。一般的には、1名のレフェリーが違反したプレーヤーにイエローカードを示す。1名のレフェリーが違反したプレーヤーの前から、他方のレフェリーが背後からイエローカードを示したのでは効果がない。警告となったプレーヤーの番号を指で表示してはならない。そっぽを向いている、あるいは床に横たわっているプレーヤーに対してイエローカードを示してはならない。必ず相手の正面に立ち、目を見つめてイエローカードを提示する。いかなる場合でも、どのプレーヤーが警告となったのかについて、レフェリーはオフィシャル席と確実にコンタクトをとり、その後に競技を再開する。

31. 退場となったプレーヤーがコートを出るタイミングと、別のプレーヤーが交代のためにコートを出るタイミングが重なる時、どのプレーヤーが退場者なのか非常に判りにくいことがある。混乱を招かないためにもレフェリーは常に明確な退場のジェスチャーで違反したプレーヤーを特定し、オフィシャル席と確認をとった後に競技を再開する。このことは、罰則を与えられたプレーヤーにとっても重要である。

32. レフェリーは、ペアのレフェリーとの視線交換(アイコンタクト)によって常に連携を心掛けるべきである。アイコンタクトや身体の動き、身振り手振りでペアのレフェリーとの相互理解を図らなければならない。レフェリーの任務も正しく分担されなければならない。レフェリーは2名で構成される1つのチームである。

33. ゴールレフェリーが笛を吹いた後もゴール近くの自分の場所にとどまっている場合、その笛は防衛側チームの違反を意味する。つまり、コートレフェリーはそのまま観察を続ける状態にあり、後方に向かって走る必要のないことを示している。この身体表現(ボディーランゲージ)は両レフェリーが相互理解を深める会話でもある。ところが、次に行くべきフリースローの方向がゴールの方向であることを示そうとして、ゴールレフェリーがプレーイングエリア方向に歩み出ると、プレーヤーに勘違いさせる可能性が生じる。したがってゴールレフェリーは、アウターゴールラインの後方からフリースローの方向指示をおこなうだけにとどめるべきである。

34. 両レフェリーは様々な試合の状況に関する考え方が一致していなければならない。例えば、コートレフェリーがプレーを続行させ、かつそれを動きで示しているのに、ゴールレフェリーが違反を見つけて笛を吹いてしまうのは良くないことである。また、プレーヤーの依頼に対して、一方のレフェリーが競技時間の中断を認めないにもかかわらず、非常に遠い位置にいるペアのレフェリーがその依頼に承諾してタイムアウトを取ってしまうのも拙いことである。さらに悪いこととして、コートレフェリーが言葉やジェスチャーでプレーヤーに適切な注意を与えているときに、ゴールレフェリーがそのプレーヤーに対してイエローカードを挙げる場合や、ペアのレフェリーが7mスローの判定をした後、笛を吹かなかった他方のレフェリーが退場を付加する場合がある。

35. タイムアウトは1試合を通して同一の基準で、公平かつ平等にとらなければならない。競技の最後の1

分間であろうと、また、たとえプレーヤーの依頼があろうと、競技規則に則って処理すべきである。しかし、何らかの理由(ボールが観客席に飛び込む、公示時計が作動しなくなる、床が滑りやすくなる、照明が消えてしまう、プレーヤーが負傷するなど)により競技の続行が不可能なとき、競技時間は中断される(タイムアウト)。

36. レフェリーはタイムアウトの合図(笛を3回吹く)の後、公示時計をよく見て競技時間が中断されているかどうか、つまり時計が止められているかどうかを確認する。同様に、競技の再開時には時計が作動していることを確かめなければならない。

37. レフェリーはIHF/PRCによって規定されたジェスチャーに精通し、これを有効に使わなければならない。ジェスチャーは、レフェリーがプレーヤー・ペアのレフェリーやオフィシャル席と意思を通わせる手段である。レフェリーがジェスチャーを常に適切に用いれば、試合の展開の中で誤解や混乱がなくなるであろう。もしレフェリーがジェスチャーを効果的に使用し、正しくかつ確実に意思の疎通が図られれば、万人に心地よい印象を与えるであろう。プレーヤー、コーチ、そして観衆は、どのような根拠に基づいて「その判定」が下されたのかを知る権利がある。ジェスチャーは、鏡の前で練習をするのが最良である。

【笛の合図とそのメロディー】

38. 様々な違反を判定する際、笛を一樣に吹くのは適切ではない。それぞれの笛の音は、各違反のもつ特質を反映していなければならない。観衆は瞬時に起こる様々な状況を逐一見なくても、その笛の音を聞いて状況を判断できるからである。それだけに、レフェリーは笛の音の強弱、長短、メロディーなどでプレーの状況や場面に応じた笛の吹き方を工夫すべきである。

この意味において、7mスローの判定や退場に相当する違反、1対1の激しい攻防状態を阻止する場面では、鋭い笛の音が要求される。通常の違反や得点の際には、それほど強い笛の音は必要ない。得点後の競技の再開時やスローの位置を修正した後の笛は、短くはっきりとした吹き方がよい。

39. 両レフェリーが同時に笛を吹いたならば、コートレフェリーの判定が確認できるまでゴールレフェリーは方向指示やジェスチャーを待たなければならない。そしてその後で、その場面に応じたジェスチャーを行うべきである。両レフェリーが1つの違反に対して同時に笛を吹いたが、両レフェリーの判定の方向が全く逆であった場合、競技規則17:8に従い、両レフェリーが協議した末に合意した判定を採用する。どうしても合意に達しないときは、コートレフェリーの意見を採用する。この際には、必ずタイムアウトをとり、手短かに協議しなければならない。協議を終えた後は、はっきりと方向を指示し、笛の合図によって競技を再開する。

40. セット攻撃に際して、ゴールレフェリーはボールを持っていないプレーヤーから目を離さず、主にゴールエリア付近にいるプレーヤーと、そこでのプレーに注意しなければならない。ゴールレフェリーは、ボ

ールを持っているプレーヤーを観察したり、コートレフェリーの担当区域での違反を見つけて罰したりするべきではない。このような行動は、ペアのレフェリーに対する不親切な越権行為であり、また心理的な侮辱につながり、不平不満や信頼喪失の種になるであろう。しかしながら、プレーヤーがコートレフェリーの視界を遮った場合、あるいはゴールエリアライン付近でプレーが行われている場合は、言うまでもなくゴールレフェリーはコートレフェリーを助けなければならない。

41. 常に両レフェリーが肝に銘じておかなければならない競技規則は、防御側プレーヤーの違反によって攻撃側チームに与えていたアドバンテージを継続できないと判断したときには、レフェリーは笛を吹いて競技を中断しなければならないというものである。シュート動作の後に起きた違反に対しても罰則を適用することができる。

42. レフェリーは明らかな違反行為に対してのみ笛を吹く。レフェリーは直感に頼ってはならない。あやふやで疑わしい判定はレフェリーの弱点を露呈するものである。レフェリーの笛の合図は、競技に役立つものでなければならず、邪魔するものであってはならない。コーチやプレーヤー、観衆のアピールによって笛を吹いてはならない。

43. レフェリーが自分自身を誇示するために意図的・作作的にプレーヤーを罰する、あるいは意のままにプレーさせようとする状況をよく見かける。競技を頻繁に止めることが試合の秩序維持につながるという考え方には賛同できない。よりよい競技の運営管理とは、笛が競技規則に従って必要なときに吹かれ、レフェリーの存在が目立たない状態である。

44. 競技規則 13 : 2 にあるとおり、レフェリーが某業側チームの違反を判定することにより攻撃側が不利になるような場合は、防御側チームの違反を判定してはならない。言い換えると、ボールを所持しているチームが違反していないならば、競技はそのまま続行されるということである。

45. 好ましくないことであるが、早すぎるタイミングで笛を吹いてしまうことが多い。したがって、レフェリーに対しては常に観察者の助言が必要である。プレーヤーと一緒に競技しているつもりで、試合に対する思考を深めなければならない。よい位置取りをしているプレーヤー、ゴールを狙っているプレーヤー、そしてその味方のプレーヤーを邪魔するような笛を吹いてはならない。レフェリーはつまらない理由で競技を中断させてはならない。

46. 競技中しばしば、レフェリーは何が重要なかを考えないまま笛を吹いてしまう。例えば、シュートされたボールがゴールに入ったにもかかわらず、ゴール前で起こった防御側プレーヤーの違反を見つけ、シュートの結果を見極めないまま笛を吹いてしまう。ボールはゴールに入ったのだが、その前に笛が吹かれたために得点は認められず、フリースローラインの前からのフリースローが与えられるだけとなる。これは明らかに無実の罪によって、攻撃側チームが罰せられたのと同じことである。よく似た例に、ボールを持ったプレーヤーがその技術と身体能力を發揮して防御側プレーヤーのホールディングを振り切り、ゴー

ルエリアラインの前のノーマークゾーンから飛び込んだ(13 : 2)。しかし、この瞬間にレフェリーの笛が鳴ってフリースローが判定され、防御側プレーヤーに罰則が適用された。これは明らかに早すぎる笛であり、シュートの結果を見つけた後からでも違反を罰することができたはずである。

47. 競技中に起こりえるあらゆる状況について、レフェリーは予測して対応できる能力を身につけておかなければならない。例えば、シュートされたボールがゴールポストやゴールキーパーに当たり、ゴールエリアライン付近に立っていた攻撃側プレーヤーにキャッチされた。しかし、ボールがプレーイングエリアの方向に転がっている途中で、レフェリーが笛を吹いた。シュート動作の最中に防御側プレーヤーの違反があったと、レフェリーは見なしたのである。判定はフリースローラインの前からのフリースローである。この場合、レフェリーは急いで笛を吹く必要はない。アドバンテージをよく見ることが重要だったのである。

48. 次のような状況もよく見受けられる。3名の攻撃側プレーヤーが1名しかいない防御側プレーヤーに向かって走っている。防御側プレーヤーは違反して、攻撃側プレーヤーのうちの1名を阻止した。レフェリーは笛を吹き、その防御側プレーヤーを退場とした。笛を吹くのが早すぎて、レフェリーの判定は違反をしたチームに有利になった。攻撃側チームに競技の続行の機会を与えれば、明らかな得点チャンスを得ることができたのに、レフェリーの笛がそれを許さなかったのである。

49. このような状況もよく起こる。攻撃側プレーヤーが非常に積極的な防御側プレーヤーの目の前でボールを得た、と同時に防御側プレーヤーがそのプレーヤーを突然つかまえて動きを阻止した。レフェリーはそれを見て笛を吹いた。レフェリーの判断は明らかに誤りである。ボールを持ったプレーヤーには3歩または3秒間プレーする権利がある。レフェリーの早すぎる笛のために攻撃側プレーヤーは得点を狙うチャンスを失うことになり、そして違反をした防御側プレーヤーは退場を免れたのである。

【適応の過程、その他の注意事項】

50. 両チームに対して判定の基準を理解させ、この基準に適応させていく過程が、レフェリーにとって特に重要である。競技の最初の10～15分は、通常のプレーの範囲内での違反については、寛大な気持ちで対処していくことをレフェリーに勧める。その他の違反の40～60%は、罰則が段階的に適用される1回目または複数回目の違反に相当するわけであるから、疑わしい程度の違反については片目を瞑っておくべきである。さらに詳述すると、レフェリーが警告とするときには、笛の音、全身を使ってのジェスチャー、身振り手振り、素早い現場へのアプローチ、口頭での指示、というあらゆる手段を有効に使い、プレーヤーに対して「ここがフリースローと段階的罰則の適用との境界だ」ということを明確に示す。それを実践することにより、レフェリーとプレーヤー/トレーナーとの間に不要な対立が生まれないようにしなければならない。

51. レフェリーが試合全体を通して堅持しなければならないことは、注意や罰則を与えた違反と同程度の違反が繰り返されたときには、罰則を段階的に適用することである。
52. レフェリーは競技の開始直後から一貫してアンフェアなプレーを阻止しなければならない。しかし「退場となったプレーヤーの数が多いほどレフェリーの管理能力が高い」という考え方は間違いである。レフェリーの個性と終始一貫した明瞭な判定基準を競技に反映させることが、最高のレフェリーを演じる際の礎石となるものである。
53. 7mスローが行われるとき、レフェリーはボールがゴールに入ったかどうかだけに着目するべきではない。コートレフェリーはスローに際しての違反についても注意すべきである。特に女子の場合によく見受けられるが、ジャンプしながら、あるいは飛び込みながらのシュートに注意しなければならない。このような状態はボールを手から話す前に（基準足となる）片足が床から離れており、違反（不正なスロー）である。
54. レフェリーが特に注目しなければならないのは、シュートの動作中、またはシュートの後に起きる不正な行為である。ロングシュートの際にも不正なプレーがよく見受けられる。レフェリーの視線はついついボールを追ってしまい、そのために次のような不正な行為が見逃される。
- (a) 防御側プレーヤーがシュートを打ち終わった後のシューターを突き倒す。
 - (b) シューターの利き腕をつかみ、しかも負傷させる危険性をはらんでいる。
55. プレーヤーが記録用紙に記載された番号と違う番号のユニホームを着用してコートに入ったときは、次のように処理する（ただし、各大会要綱に処理方法について明記しておくことが望ましい）。
- (a) 特別な場合を除いて、記録用紙に記載されている番号は競技中に変更できないので、ユニホームの番号をそのプレーヤーの元の番号に戻さなければならない。なお、特別な場合とは、多量の血液がユニホームに付着してきれいに拭ききれないときを指す。
 - (b) その他の場合、記録用紙に記載された番号を訂正する。
 - (c) 国際公式競技（世界選手権やオリンピックなど）の場合は、競技の終了後に裁定委員会に文書で報告する。
56. プレーヤーが負傷したためにレフェリーが競技時間を止め、そしてジェスチャー 17 を合図したならば、負傷したチームの 2 名（チーム役員またはプレーヤー）だけがコートに立ち入ることが出来る。
57. オフィシャル席から笛が吹かれたとき、レフェリーはその笛に呼応してタイムアウトをとる。このとき、一方のレフェリーだけがオフィシャル席に行き、他方のレフェリーはコート上で両チームを監視する。
58. ゴールエリア内にジャンプするとき、不正な利益を得る（勢いをつける）ためにプレーヤーが助走としてサイドラインの外側を使ったならば、そのプレーヤーの相手チームには（スローインではなく）フリースローが与えられる。この違反が繰り返されたならば、罰則が段階的に適用される。

59. ゴールキーパーの身体の一部がゴールエリアラインの外側にあるプレーイングエリアの床に触れた瞬間に、ゴールキーパーはゴールエリアから出たとみなされ、コートプレーヤーに対する競技規則が適用される。ゴールキーパーがプレーイングエリアでボールを持ち、その後足または身体の一部がゴールエリア内の床に触れたならば、相手チームにフリースローが与えられる。
60. 監督やコーチがレフェリーの判定に不満を持ち、ジェスチャーや言葉でレフェリーの判定に反駁したならば、その監督やコーチは警告となる。レフェリーの正しい判定に対してコーチが不正な行為を示せば、当然ながら警告となる。しかし、相手チームがボールを所持して攻撃中のときは、直ぐにイエローカードを出さず、競技が中断されたときに警告とする方が無難である。レフェリーがタイムアウトを取って、攻撃側チームの監督やコーチ、または交代地域にいるプレーヤーに対して注意、警告、退場、または失格を与えた場合、相手チームのフリースローで競技を再開する。
61. フリースローの笛が吹かれた後、違反したプレーヤーが直ちにボールを離さなかったため、相手チームは直ぐにボールを手にする事が出来なかった。これはスポーツマンシップに反する行為として退場となる。（16:3e）
62. 両レフェリーは警告や退場を判定した後、競技の再開前に罰則を与えたプレーヤーやチーム役員をメモしておく。それを怠って競技の再開後にメモをすると、その間に起こった違反行為を見落としてしまう危険性が生じる。
63. 前半の、または競技の終了合図の後であっても、フリースローを行わなければならない場合がある。このときにスローされたボールを防御側プレーヤーが足で防いだ（ブロックした）ならば再度フリースローが与えられ、ボールを足で防いだプレーヤーはスポーツマンシップに反する行為として罰則を与えられる。
64. 【改正により削除：知っている」と得するルール&知らない」と損するルール【1】参照】
65. ゴールエリア上の空中でボールをキャッチしてシュートするために、プレーヤーがゴールエリア上にジャンプした。しかし、そのプレーヤーはボールをキャッチできずにゴールエリア内に着地した。この場合にレフェリーは直ちに笛を吹き、これを意図的なゴールエリアへの侵入と判断する。
66. 7mスローの実施中にボールがスローを行っているプレーヤーの手から床に滑り落ちたとき、攻撃側プレーヤーがこのボールに触れれば、レフェリーは相手チームにフリースローを与える。このボールを防御側プレーヤーが所持したならば、レフェリーはアドバンテージルールを適用して競技をそのまま続行させる（13:2）。
67. プレーヤーのユニホーム（シャツやパンツ）をつかんだり、引っ張ったりする行為は、原則的として罰則が段階的に適用される（スポーツマンシップに反する行為）。
68. 競技中、レフェリーはボールに触れても、ボールをキャッチしても、またプレーヤーに手渡してもいけない。その理由は最後の 1 秒に得点を得られるチャンスが到来するかもしれないからである。そのと

きレフェリーは、ボールの処理や時間の節約で一方のチームを助けた結果である、と相手チームや観衆から非難されるであろう。

69. ゴールレフェリーは、防御側プレーヤーの違反だけでなく、攻撃側プレーヤーの違反にも注意を払わなければならない。防御側プレーヤーの間に隙間を作り出すために攻撃側プレーヤーがブロックプレーを試みるとき、防御側プレーヤーを押したりつかんだりすることがある。ボールをキャッチする前後のポストプレーヤーが防御側プレーヤーをゴールエリア内へ押し込み、わざと倒れ込んで7mスローの「獲得」をアピールすることもある。

70. レフェリーの任務は単に違反行為を見つけて罰則を与えるだけではない。レフェリーはハンドボールに適しない行為を排除することで、正当なプレーが保証されるよう助力しなければならない。単に「ボールの行方」を視線で追うだけでは不十分であり、どのようにボールをプレーするかあるいはボールを得るためにどのように戦っているかを見極める知識と経験を十分に積まなければならない。

71. 競技の開始前にプレーヤーがどのようなアクセサリー（イヤリング、ネックレス、指輪、ヘアピンなど）を身につけているかを、レフェリーは必ず点検する。この類のアクセサリーについては取り外させるか、テープなどを上から貼りつけるようにさせなければならない。パワーパンツが短パンツの下からはみ出るときにはユニホームと同色であれば許される。

72. 両チームのウォーミングアップが終わった後、レフェリーはゴールとゴールネットの状態を点検する。しかし、両チームが競技を開始するための準備を整えて既に整列している場合は後で点検する。

73. 得点の後、スローオフの前、ハーフタイム中など、機会を見つけて、レフェリーはどのプレーヤーが既に警告となったか、または退場となったかをチェックしなければならない。レフェリーがイエローカードを示したとき、既に警告となっていたプレーヤーが自らコートを出ていくことのないように努める。

74. レフェリーが1名のプレーヤーに対して2回の、あるいは一方のチームに対して4回のイエローカードを示すのは、明らかにレフェリーとオフィシャルのミスである。

75. ゴールキーパーが退場となった場合、別のゴールキーパーを出場させなければならない。しかし、チームはコート上のプレーヤーを2分間減らして競技をしなければならず、結果としてコートプレーヤーの数を2分間減らすことになる。

76. ゴールキーパーのユニホームに着替えたコートプレーヤーが、ゴールキーパーと交代して他のコートプレーヤーとともに攻撃に参加したが、ボールは相手チームの手に渡ってしまった。交代地域にいたゴールキーパーが慌てて別のコートプレーヤーと交代してゴールエリアに戻った。これは明らかな違反であり、交代して入ったゴールキーパーが退場となる。競技中、コート上に2名のゴールキーパーがいてはならないのである。

77. 退場となったプレーヤーはコート外に出なければならない。退場者がコートを出た後に、競技が再開さ

れる。同様にタイムアウトの後も、すべてのチーム役員と交代プレーヤーがコート外に出たことを確認してから競技を再開する。

知っている得するルール & 知らない損するルール 新ルールを中心に

(財)日本ハンドボール協会審判部長 島田房二

【1】終了合図の後のフリースロー（最後の1投）

（延長戦も含めて前後半の）終了合図の後のフリースローを滞りなく実施するために、プレーヤーの交代と攻撃側プレーヤーの位置に関して特別規定が設けられた。プレーヤーの交代が許されるのは攻撃側チームの1名だけであり、防御側プレーヤーの交代は認められない。どちらのチームも違反した場合には、不正交代により2分間退場となる。ただし、ゴールキーパーが負傷した場合と最後のプレーに関してゴールキーパーが退場・失格となった場合は、例外的に交代が認められる。また、攻撃側プレーヤーは、スローを行うプレーヤーから3m以上離れなければならない。

【攻撃側チーム】レフェリーは攻撃側チームの準備ができ次第、フリースロー開始の笛を吹くことになる。というのは、防御側プレーヤーは交代できないため、防御側チームの準備を待つ必要がないからである。レフェリーと協力して、フリースローを行うプレーヤーは指示された正確なポイントに素早く立ち、味方のプレーヤーもポイントから速やかに3m離れれば、防御側チームの準備の整わないうちに（スローの合図の笛に引き続いて）シュートを打てる可能性が生まれる。

【防御側チーム】プレーヤーは交代できないため、自陣のフリースローライン（9mライン）のところからフリースローが実施される場合には、できるだけ早くゴールエリアライン（6mライン）に沿って効果的な防御壁を作る。

【2】7mスローを判定したときのタイムアウト

7mスローを判定したときに必ずしもタイムアウトを取る必要がなくなったため、その判断はレフェリーに委ねられるようになった。ルールブックには、タイムアウトの有無について一貫性を保つよう記載されている（競技規則解釈2）。

7mスローを行うプレーヤーとゴールキーパーが特に遅れもなく通常どおりの時間をかけてスローの準備をする場合、タイムアウトにはならない。得点経過などの他の要因に関係なく、この原則が適用される（これは、ボールがコート外に飛んでいっても、明らかに数秒後にプレーに戻される場合と同様である）。この中断も競技の一部であり、決してタイムアウトにならない。

7mスローを行うプレーヤーとゴールキーパーが交代する場合やスローの実施前に床を拭く必要がある場合など、特別に遅れの生じるときは、タイムアウトになる可能性がある。時計を止めなかった場合に一方のチームが不当に不利になるかどうか、レフェリーの大切な判断根拠になっている。これは主に得点経過や残りの競技時間に左右される。特に競技の終盤で得点が僅差の場合は、タイムアウトになる（ホームアンドアウェイ方式の2試合目では、前試合との合計得点が問題となるのは当然である）。同様に、一方のチームが人数的に有利な状況にあり、（相手の2分間退場）そして大差をつけていない場合には、タイムアウトになり、退場時間が浪費されない（相手の退場に伴う有利さが減らない）ようになる。

結局のところ、以前ほどタイムアウトにならなくなったし、その有無はレフェリーの判断に委ねられることになった。したがって、自チームが急いでいる場合、タイムアウトをあてにするのではなく、できるだけ速やかに7mスローの準備をする。一方、タイムアウトになって欲しくない場合に遅延行為を企むと、直ちにタイムアウトになってしまい、速やかにスローの準備を行う方がかえって時間的に得する可能性もある。

【3】競技の終了間際における失格

競技の終了間際に、相手が（決勝点、同点、必要な得失点差を狙って）シュートするための位置や7mスローの判定可能な位置に到達する時間がなくなるように、プレーヤーが相手に対して危害を及ぼすような違反行為（直接失格）や著しくスポーツマンシップに反する行為（直接失格）をした場合、失格となるだけでなく、さらに報告書に基づいて処分（出場停止）が追加されることになった。ところが、この解釈に対して、相手に対して危害を及ぼすような行為さえしなければ失格や報告書を免れると誤解するプレーヤーも出てきた。通常どおり段階的に罰則を適用される違反行為（警告 退場 退場 失格）と相手に対して危害を及ぼすような違反行為（直接失格）を区別する判定基準は、明らかに競技の初めから終わりまで同じである。言い換えると、競技中（インプレー中）に起こった、段階的に罰則を適用すべき違反行為に対しては、たとえ競技の終了間際であっても、直接失格ではなくて2分間退場である。

しかし、競技の中断中（例えば、得点をあげてからスローオフまでの間や、相手がフリースロー・スローイン・ゴールキーパーズスローの準備中）は別問題となる。プレーヤーが相手をつかまえてスローを遅らせる、あるいはスローをさせない場合などは、違反行為ではなくてスポーツマンシップに反する行為（警告 退場 退場 失格）である。つまり、段階的に罰則を適用される違反行為や相手に対して危害を及ぼすような違反行為と全く関係がない。プレーヤーが相手に触れなくてもスローをさせないに等しい影響を与えた場合も、同様に処置される。

競技の序盤にこのような振る舞いをした場合、スポーツマンシップに反する行為と見なされ、段階的に罰則が適用される。しかし、このような振る舞いが単なるスポーツマンシップに反する行為（警告 退場 退場 失格）なのか、著しくスポーツマンシップに反する行為（直接失格）に相当するのかは、そのときの試合状況によって決定される。競技の終了間際で、なお勝敗の行方の分からない状況で、最後の得点機会を得

ようとしている相手をスポーツマンシップに反する行為により妨害した（影響を与えた）場合、このような行為はすべて「著しく」スポーツマンシップに反する行為と見なされる。つまり、直接失格となり、報告書が提出されることになる。

【4】3mの距離の確保

相手がフリースローやスローイン、スローオフを行う場合、防御側プレーヤーはスローを行うプレーヤーから3m以上離れなければならない（自陣のゴールエリアラインに沿って立つ場合を除く）。これに違反した場合、直ちに警告となる。まず、「1回目の違反=注意」という考えは誤りであり、「1回目の違反=警告」である。ただし、フリースローの実施前にレフェリーがポイントの近くに来て「3mの距離の確保」のジェスチャーをするのは、注意ではなくて、いわば「交通整理」のようなものである。そして、「3m以上離れる」とは「3m以内に近寄っていいではない」という意味だけでなく、笛が鳴ったときに「3m以内にいた」場合、直ちに「その場から離れなければならない」ことを意味する。相手のフリースローやスローイン、スローオフに際しては、たとえ意図的でなくても、相手のスローを妨害しないよう注意する。

[違反の具体例] 防御側のフリースローライン（9mライン）のところからフリースローを行う場合、防御側プレーヤーが3m以内に近づいて防御する。オーバーステップの違反の判定後、そのプレーヤーは直ちにボールを床に正しく置いたが、フリースローを行おうとしている相手プレーヤーの眼前から立ち去らない（3m以上離れない）防御側チームの交代ライン（長さ4.5m）の中央から攻撃側プレーヤーがスローインを行おうとしているとき、防御側の交代プレーヤー（あるいは、ちょうど退場時間の満了した防御側プレーヤー）がその脇をすり抜けてコートに入る。プレーヤーが得点後にセンターラインの中央付近を通って帰陣しているため、クイックスローオフを行おうとしている相手プレーヤーと交錯する。スローオフに際してマンツーマンディフェンスを仕掛けようとしている状況で、スローオフの笛が鳴った瞬間に攻撃側プレーヤーは相手陣に走り込み、と同時に防御側プレーヤーはスローオフを行おうとしている（まだボールを持ったままの）プレーヤーのすぐ近く（3m以内）に立ちただかる（笛が鳴ってから3秒経過していない）。

【5】パッシブプレーの予告合図

パッシブプレーの予告合図について、今回のルール変更で強調されている点は、フリースローやスローイン、スローオフ、ゴールキーパーズスローの実施における遅延行為に対する処置である。

[巧みなる遅延行為の例] フリースローやスローインの正しいポイントをわざと間違えて誤った位置に立ち、レフェリーに指示されて正しい位置につくまでの時間をかせぐ。スローを行おうとしているプレーヤーが正しいポイントにつく前に、靴紐を結び直したり、パンツの外に出ているシャツを中に入れたりする。ゴールの中からボールを取り出すとき、ボールがネットに絡んだふりをして、スローオフやゴールキーパーズスローの実施を遅らせる。得点された後にゴールキーパー（またはコートプレーヤー）が、ボールを持ってコート中央に向かって歩く、ボールをコート中央に向かってゆっくりと転がす、妙なパスをする、あるいはボール

をコントロールし損なったふりをする、などして時間を使う。

このような巧みな遅延行為をした場合、1回目はレフェリーから注意される（レフェリーに見破られたということ）、しかし、（1回目とは別種類のスローで、巧みな遅延行為のタイプが異なっても）2回目からは、スローを行った直後にパッシブプレーの予告合図が出る（手が上がる）ことになる。

パッシブプレーの予告合図が出される他の状況は従来と同じである。1. ゆっくりと交代したとき、あるいはボール運びのペースを落としたとき プレーヤーがコート中央付近に立って交代が完了するのを待っている。プレーヤーがドリブルをしながら立ち止まっている。相手が積極的に防御していないにもかかわらず、ボールを自陣のコートへ戻す。2. すでに組立て局面に入った後で、プレーヤーが遅れて交代したとき すべてのプレーヤーがすでに攻撃隊形を整えており、チームは準備のパスプレーを行って組立て局面に入っている段階になって、ようやくチームがプレーヤーの交代をする。[注] 自陣から速攻を仕掛けたチームが相手陣に入ってからすぐに得点チャンスを作れなかった場合、その段階で速やかにプレーヤーが交代することは許される。3. 組立て局面の時間が長すぎるとき チームが狙いを定めた攻撃態勢に入るとされる前に、組立て局面で準備のパスプレーを行うことは、原則として認められる。組立て局面が長すぎる典型例を次に挙げる。チームの攻撃が、狙いを定めた攻撃活動に移行しない（注：「狙いを定めた攻撃活動」とは、攻撃側チームが戦術的な方法を用いて、防御側に対して空間的に有利な状況を生み出せる形勢にあるときや、組立て局面よりも攻撃のペースを上げているときの状態を特に指す）。プレーヤーが立ったまま、あるいはゴールから遠ざかりながらパスを繰り返している。立ち止まったまま、ボールをドリブルしている。攻撃側プレーヤーが相手に対峙したときに、早々と引き下がる、レフェリーが競技を中断するのを待つ、あるいは防御側に対して空間的に有利な状況を作らない。積極的な防御活動：防御側プレーヤーが、相手の自由なボール運びや走行を封じて、攻撃のペースを上げさせない積極的な防御方法（プレスディフェンス）、組立て局面から最終局面に向けて、攻撃側チームは明らかにペースを上げることができない。

レフェリーの視点からの感覚的な話になるが、世界選手権大会における他国のプレーと比較して、日本は得点されてから次のスローオフまでに時間がかかり過ぎているように思われる。2005年チュニジア世界選手権大会では1試合の攻撃回数が平均で120回に達しており（1回の攻撃時間は平均で30秒）しかも、セット攻撃で「組立て局面」はほとんどなく、すぐに「狙いを定めた攻撃」を始めていたと報告されている。より得点力の高いチームを目指す必要があると考えられる。

次に、パッシブプレーの予告合図が出されたとき、すぐに慌ててシュートを打ちに行くチームを時々見かける。予告合図が出された後に、1回の「組立て局面」が認められているので、これを活用してから「狙いを定めた攻撃活動」に移り、そして「最終局面」に到達すればよいのである。

【6】各種スローにおける攻撃側の違反

各種スローとは、スローオフ、スローイン、ゴールキーパーズスロー、フリースロー、7mスローを指す。

[スローの実施前]スローの実施前に、スローを行うプレーヤーまたはその味方のプレーヤーが違反している（例えば不正な位置にいる、あるいは味方のプレーヤーと同時にボールに触れている）場合は、これを正される。

[スローの最中]スローの実施中に、スローを行うプレーヤーまたはその味方のプレーヤーが違反した場合には、まずその前に笛の合図があったかどうかによって処置が異なる。

再開の合図がない場合、スローの実施中のどの違反も原則的に正され、笛の合図の後に再度スローを行う。しかし、この場合にもアドバンテージルールの考えが適用される。スローを行うプレーヤーが不正なスローを行った直後にボールの所持を失った場合、単にスローは完了したと見なされ、競技は続行される。例えば、ゴールキーパーがゴールエリアライン（6mライン）を踏み越えてゴールキーパーズスローを行い、あるいはセンターラインやサイドラインから足が離れた後にスローオフやスローインを行い、またはジャンプしてフリースローを行い、そのボールが相手チームにカットされた場合は、そのまま競技が続行される。

再開の合図後の場合、スローの実施中の違反はすべて違反として判定される。例えば、スローを行うプレーヤーが実施中にジャンプした、3秒より長くボールを持った、あるいはボールを手から離す前に正しい位置から移動した場合は、すべて違反と判定される。笛の合図の後、スローを行うプレーヤーがボールを手から離す前に、その味方のプレーヤーが不正な位置に侵入した場合にも違反と判定とされる。再開の合図後の場合もアドバンテージルールが適用される。つまり、違反に対する笛が鳴る前にスローを行うチームがボールの所持を失えば、競技は続行される。

[スローの実施直後]スローの実施直後の（スローに関する）違反は原則的にすべて違反として判定される。これは、ボールが他のプレーヤーかゴールに触れるまでに、スローを行ったプレーヤーが再びボールに触れた場合を指す。例えば、ドリブルをしたり、ボールを宙に離れた後や床に置いた後に再びボールをつかんだりする場合である。この違反に対して相手にフリースローが与えられる。上記と同じく、アドバンテージルールが適用される。

【7】クイックスタートのスローオフ

2005年の夏にチェコで開催されたジュニア世界選手権大会で、国際ハンドボール連盟の競技規則審判委員会のアール委員長は、クイックスタートのスローオフの行い方について、以下のようにレフェリーを指導している。「クイックスタートのスローオフは、今のスピーディーハンドボールの大きな魅力の一つである。スローオフを行うプレーヤーは完全に静止する必要はないが、全力疾走のまま一瞬センターラインを踏むと同時にスローを行って駆け抜けていく動作は認められない。例えばスピードを一旦落としたり、走るリズムを変えたりしてセンターラインを踏み、止まろうとする意思を姿勢で表現しなければならない。」と。

スローオフを行うとき片足をセンターライン上に置き、他方の足はセンターライン上に置くか、センターラインの後方になければならない（他方の足は宙に浮いていてもよい）。特に、不正なクイックスタート

のスローオフによって防御側が不当に不利になる場合は、競技中断となり、笛の合図後に再度スローオフをやり直すことになる。(ただし、【6】で述べたようにアドバンテージルールを適用されることがある)

【8】ゴールエリア内での防御

ゴールエリアライン(6mライン)を踏んで立っている(それほど移動していない)防御側プレーヤーが、その場で、またはジャンプしてロングシュートやミドルシュートをブロックした場合、いわゆるラインクロス違反として相手にフリースローが与えられる(7mスローにはならない)。これは、ゴールエリアラインを踏んでいても、相手が明らかな不利益を被ったとは言えないからである。しかし、ゴールエリア内に大きく(1歩分以上?)入り込んでロングシュートやミドルシュートをブロックした場合には7mスローとなる。しかし、相手を危険にさらさない限り、このように単発的なゴールエリア内への侵入に対して罰則は適用されない。スポーツマンシップに反する行為として罰則が適用されるのは、相手に対して有利になるように基本的な防御位置としてゴールエリア内を戦略的に使用している場合である(1回目は注意、2回目は警告)

【9】予備ボールの活用

ボールがコート外に出ていき、コートに戻るまで時間のかかる場合(コート外の遠くへ飛んでいったときや空席の目立つ観客席に入ってしまったとき)タイムアウトにしないで、すぐに予備のボールを使用することになっている。律義に遠くまで取りに行く必要はなく、すぐにレフェリーとアイコンタクトを取って速やかに予備のボールを使って競技を再開する。この対処法に慣れておけば、いざ1秒すら惜しい状況でボールが遠くへ飛んでいったとき、数秒を節約できるかもしれない。

【10】オーバーステップ

最近まで、国際ハンドボール連盟の競技規則審判委員会は、オーバーステップの判定に関してあまり積極的に発言してこなかった。しかし、2005年に同委員会の委員長がステインバッハ氏からアール氏に交代してから、世界選手権大会のレフェリングコメントでもっとオーバーステップをしっかりと見極めて判定するよう促している。

日本では数年前に(ドリブル後の)ステップの数え方について混乱した時期があったが、世界ではどうなっていくのが注目すべき時が来たように思われる。今後の情報を待ちたい。

以上、知っていれば戦術的に活用できる可能性、そして知らなければ思わぬ落とし穴に陥る可能性のある事項について、新ルールを中心に述べてきた。戦術の多様化と相まって、ルールも近年ますます細かく規定されてきている。日本中のプレーヤーの競技能力が千差万別であるのと同じく、全国津々浦々の何千人ものレフェリーの審判技術力も様々である。(財)日本ハンドボール協会審判部として、できる限り審判技術水準を高めるよう努力しているが、難しい問題もたくさん抱えている(これはヨーロッパ諸国も同じである)。

しかし、ここにいる皆さんがトッププレーヤーとして世界の舞台に立ったとき、そこに結集するレフェリーも世界のトップクラスである。この実情をよく理解して日頃のトレーニングを積み重ね、ハンドボール界のさらなる発展にご協力願いたい。

審判員の心得10箇条

「レフェリーは、すばらしいハンドボールを創造する陰の演出者でなければならない。」

リーダーシップ (Leadership)

レフェリーはゲームを管理・運営していく指揮者でなければならない。監督・選手が何を言ってもレフェリーがいなければ試合はできない。そのためにも、指揮者として選手にどのようなゲームをさせたいのかというハンドボール観あるいはハンドボール理念を持たなければならない。

誠実さ (Honesty)

レフェリーは誠実でなければならない。勝敗の行方がどうであっても最善を尽くし、ひとつひとつ丁寧に、特に初心者のプレイほど丁寧に吹笛する必要がある。

ルールに関する知識 (Knowledge of the Rule)

ルールを熟知していること、さらにその根底にある意図・思想を理解する。反則された者が不利に、反則した者が有利になってはならない。

冷静さ (Firmness)

レフェリーは瞬間、瞬間に適切な判断をしなければならない。そのためにも、自分の信念で堂々と判定しなければならない。

正しい判断 (Good judgment)

よく観察し、はっきり確認したものだけを判定する。決して予測で吹笛してはならない。アドバンテージルールがあるので、見えた全てを判定するのではなく、プレイが発展するかどうかを見極めなければならない。

身体上の適性 (Good fitness)

素晴らしい笛(タイミング、判定基準)は、良い位置にすばやく移動して適切に判定することから生まれる。

IHFレフェリーも言っている「We must run, too.」

ユーモアのセンス (Sense of humor)

ユーモアはなくて困るものではないが、もしも、選手を罰するとき微笑みを持ったなら、あなたの温かい心が相手に伝わるはずである。

勇気 (Courage)

監督・選手が恩師や先輩であってもルールはルール、たとえ罰則であっても勇気を持って公平に判定しなければならない。

協調性 (Cooperation)

競技場には二人のレフェリーがいることを常に意識しなければならない。また二人しかいないことも忘れてはならない。そのため、二人で力を合わせ、協調しながらゲームを運営しなければならない。

なかま意識 (Fellowship) 協調性とほぼ同じであるが、お互いを褒め称えることも忘れずに。

審判員としての心得

良いレフェリーになるために

- 周りに気遣いが出来るか。
- 競技場内外で自分の存在が目立っていないか。
- 公平さや客観性のある精神状態を持ち合わせているか。
- 勇気を持てるか。特に好まれない決定をする勇気。
- 他人の言葉を聞く耳を持ち合わせているか。
- 自分のベストを尽くすための準備状態を作る努力をしているか。
- ハンドボール競技のレフェリーを務めることに、誇りと楽しさが持てるか。

(1) 現象を正しく見よ

「コート上の姿勢には、そのレフェリーの人間性が現れる。」

「誠意を持って競技運営にあたらなければならない。」

安易にディフェンスの反則にしているか

ドリブルカット時

パスカット時

シュートカット時

ゴールエリア進入時

身体接触時

オフエンダーがディフェンダーの腕を連れて行く行為

ボールの移動にあわせたポジショニングを心掛けているか

C Rとして、ボール保持者の真後ろから観察する位置になっていないか。

プレーヤーから離れていないか。

逆襲に対する帰り道は考えているか。

休めの姿勢になっていないか。

G Rとして、止まったままになっていないか。

C R・G Rとも己のサイドにボールが流れた時、サイドによる姿勢を示しているか。

技術と反則を的確にとらえよ

ブロックプレーとは

ステップ

ポストプレーヤーとディフェンダーとの位置の取り合い。

サイドシューターとディフェンダーのシュート時の接触

(2) プレーヤーの立場に立て

アドバンテージの適用

ルールではボールを持って3歩3秒プレーできる。

プレーヤーにどの程度の可能性が備わっているか把握せよ。

位置の修正は早めに行い、ボールが動いてから修正しないように。

反則にこだわるあまり、ゲームを細切れにしない。

レフェリーのエゴを出すな

記録(メモ)はよいが、そのために用意のできたプレーを遅らせない。

スローオフのとき、センターラインとサイドラインの交点に位置しようと移動のためにスローを遅らせない。

7mスロー、スローの用意が出来ているが、レフェリーのアクションのためにタイミングがずれないように。

レフェリーだけが納得するような独りよがりの判定があってはならない。

(3) ハンドボールレフェリーとしての基準作り

段階的罰則適用に関する基準

ボールに対するプレーか、身体に対するプレーかの見分け。

「注意」「イエロー」「退場」の使い分け。

適用に客観性があり、説得力があるか。

ステップに関する基準

フェイントをかける前に何歩歩いたか。

ジャンプフェイントの際、ジャンプする前に何歩歩いたか。

無理にオーバーステップを作り出したり、ディフェンステクニックでオーバーステップさせているのに、

判定しなかったりといった場面が生じないように。

7mスローに関する基準

ディフェンスが意識的にゴールエリア内に入って守ったのか。

シュート時にディフェンスに反則行為があったのか。

オフエンダーがディフェンダーに接触してきたのではないか。

7mスローを与えるということは、シュートできる状況時に、ディフェンダーの反則行為によって、そのチャンスを潰されたため、改めてシュートの機会を与えることであり、この原点をしっかりと把握する必要がある。

一戦一戦、一瞬一瞬 を 真剣に対処すべし

「Law's of the game」

競技規則入門書とともに
審判員のみならず競技者・指導者の
ハンドボール競技の理解のために活用を願う！